「動機善なりや、私心なかりしか」

稲盛和夫理事長インタビュー

聞き手
吉川左紀子（こころの未来研究センター長）
Sakiko YOSHIKAWA
鎌田東二（こころの未来研究センター教授）
Toji KAMATA
平石　界（こころの未来研究センター助教）
Kai HIRAISHI

Kazuo INAMORI

稲盛和夫（いなもり・かずお）　公益財団法人稲盛財団理事長。1932年鹿児島市生まれ。鹿児島大学工学部卒業。1959年京都セラミック株式会社（現、京セラ株式会社）設立。社長、会長をへて1997年より名誉会長。1984年第二電電株式会社（現、KDDI株式会社）を設立し会長に就任、2001年より最高顧問。2010年日本航空株式会社会長に就任。1984年財団法人稲盛財団を設立し京都賞を創設。また経営塾「盛和塾」の塾長として若手経営者を育成している。1997年には臨済宗妙心寺派円福寺で得度を受けた。著書に『稲盛和夫の実学』『生き方』『成功への情熱』『稲盛和夫の哲学』『ガキの自叙伝』『敬天愛人』『人を生かす』『ど真剣に生きる』『アメーバ経営』ほか多数。

リーダーとしての人間性

吉川　早いもので、センターができて今年の４月で５年目に入りました。今までのことを振り返って、これからどういう方向でセンターの研究活動を進めていくべきなのか、皆で考えているところです。

センターは、からだ、きずな、生き方という３つの領域を中心に研究を行っていますが、研究の進めかたについては２つの課題があります。ひとつは、専門の違う研究者間の交流、もうひとつは大学と社会とのつながりという面です。そうした中で、心理学や脳科学、宗教学など、「こころ」にかかわる研究者が現代社会

の中でどういう役割を果たしていくべきなのか、社会の中で貢献していくにはどうしたらいいか、そういったことをもっと考えていくようにしたいと思っています。

学術広報誌『こころの未来』も今回から少し趣を変えて、毎回テーマを決めて内容を構成することになり、平石助教が「徳ときずな」というテーマを提案しました。平石助教は進化心理学といって、人間のこころが長い進化の過程の中でどういうふうにつくられてきたのかということを、理論的に、あるいは実験的に考える先端分野の研究をしています。進化心理学を含めて、心理学の中で最近多くの研究者が関心を寄せているのが、信頼や協力、思いやりのような、利他的なこころの起源についてです。そうしたこころが人間の中にどのように備わっているのか、環境の中でどのように育まれるのかということが議論されています。宗教学や倫理学の中でも「徳」はとても重要な概念です。

そこで、ぜひ理事長に「徳」というテーマでお話を伺って、『こころの未来』に載せさせていただければと思いました。大変お忙しい中、インタビューをお引き受けいただき、ありがとうございます。

理事長のご著書の中に、人間には魂があって、魂を磨いていくことがとても大事だと書かれています。理事長が、人間にとって「徳」がとても大事であると実感されたエピソードやご経験について、お話を伺えればと思います。

稲盛　私は、セラミックスの研究開発をずっとやっておりました技術屋です。27歳のとき、自分の研究成果をベースに工業化を始めまして、それを見込んでくれた方々が集まって、京都セラミツク株式会社（現、京セラ株式会社）という会社をつくっていただいた。そのときから、研究者とか技術屋という枠を超えて、経営者という立場になってしまいました。

最初は28名という小さな所帯でしたが、一生懸命仕事をしているうちに、どんどん会社が大きくなり、社員も増えていったのです。そのとき、経営というのはどうすればいいのかということに大変悩みました。

会社経営で一番大事なことは、どうやって人を治めるかということです。これは会社経営だけではなくて、大学でも何でもそうだと思います。組織の長にとっては、組織の人たちをどうまとめて、どういうふうに経営していくかということが最大の課題だと思います。

そうすると、そういう人たちをまとめて引っ張っていくのに一番大事なことは何だろうか。私の場合には、最先端のセラミックスの研究、技術開発をやっておりましたので、まず自分の才能とか実績がすぐれていて、みんながそれに対して敬意を払ってくれることが大事です。

吉川左紀子センター長

しかし、そういうものをあまり理解しない一般の作業者の人たちをまとめて、組織として機能させていくためにはどうすればいいのか。そうすると、やっぱりリーダーとしての人間性がキーになってくるということに気がついたんです。この人の言っていることは正しい。だから、この人の指示に従ってやっていこうと組織の中にいる人たちが思うような状態をつくらなければだめです。

しからば、そういう組織の人たちがついてくる人間性はどういうものなのかというと、立派な「徳」を備えていることではないかと思います。

「徳」といっても、あまりにも漠然としています。私がまず考えたのは、みんなが信頼し尊敬してくれるには、人間のこころのベースにある良心が大切だということです。たとえば、人間のこころの中には「真我」と「自我」がある。「真我」は非常にピュアなこころ、他を思いやる優しいこころです。これは仏教でいうと「利他のこころ」ですね。一方、「自我」は利己に満ちたもの、つまりエゴです。自分さえよければいい。自分の損得や名誉、権威、地位を守ろうというふうに、己を中心にした考え方をする。その２つが人間のこころの中を占めていて、常に葛藤している。

「徳」の高い人、つまり、みんながついてくる人というのは、みんなを優しく包み込むような思いやりのこころ、自分が若干損をしても周囲の人を助けてあげる、守ってあげるという「利他」のこころをもっている人のことで、それが一番大事ではないか。そして、利他的な、美しいこころが常に自分のこころを支配するようにするためには、自分のこころを整えることが非常に大事だろうと思い至ったのです。逆に言いますと、利己的な、エゴに満ちた自分をなるべく抑えていくようにしなければ、周囲の人から信頼・尊敬される

京都セラミツク株式会社創業時のメンバー。後列左から 6 人目が稲盛和夫氏

ようにはならないと思ってきました。

一方、リーダーというのは、その集団がどっちへ向けばいいのか、何をすればいいのか、何をしたらいけないのかを判断しなければなりません。大学の場合には、学問の自由ということで、それほど強いリーダーシップはいらないのかもしれないし、また、ないほうがいいのかもしれません。けれども、そのためにまとまっていないというところがあるのではないかと思うんです。企業はやはり１つの方向に向かって進まなければなりませんから、そのためにも、みんなに尊敬され、信頼されることが大事です。

「動機善なりや、私心なかりしか」

稲盛　物を決めていくときに、「あの人が決めたんだから、われわれもついていこう」とみんなが思ってくれないといけないので、「動機善なりや、私心なかりしか」という言葉で自分を戒めています。「こういう方向に集団を引っ張っていこうと考えているけれども、その動機は善なりや」。「善」というのはまさに良心に基づいたものなのかどうかということです。さらに「私心なかりしか」。全体のために善きことをしようとしていて、それには自分のエゴが含まれていないのかということを、常に自分自身に問いながらやってきました。

それを一番強く意識したのは、「第二電電」（現、KDDI株式会社）を創業したときです。当時の電電公社（現、NTTグループ）が、明治以来、通信事業を政府の資金を使って官営事業として独占的にやってきた。強大な力を持っていたのですが、それが自由化されて、新規参入が可能になりました。

資本主義社会では健全な競争関係があって初めて正しい状態が生まれるわけです。独占で経営をやられたのでは、受益者である国民が不利になることはみんな知っていた。だから、通信事業の自由化で、競争をする会社が新しく出てくることを国民は強く願い、行政改革で自由化を提唱した有識者の人たちもそれを期待していたのですが、電電公社はあまりにも巨大です。各家庭まですでに電話線を引いている。当時、電話線を引くのでも、非常に高い金がかかったり、家庭で引こうと思っても順番待ちだったりして大変でした。そういうインフラを持った強大な電電公社に対抗しようと思ったって、できるわけがない。日本の大企業が束になってかかっても非常にリスキーだというので、いいことだと思ってもだれも手を挙げなかったんです。

当時、京セラは売上が年間3000億円ぐらいで、まだ京都の中堅企業でしかなかった。私は、だれも出なければこの独占体制は崩れないので、何としてもそれに挑戦してみたいと考え、名乗りを上げようと思ったんです。

もともと私は化学の専門で、通信についてはまったくの素人ですから、徒手空拳です。でも、どうしてもやらなければならないという志だけは非常に高かった。そのとき、「動機善なりや、私心なかりしか」、つまり、おまえは正しい競争状態をつくって、国民にも喜んでもらう、そういう社会をつくりたいと言っているけれども、本当にその動機は間違いがないのか。そこには、自分の売名だとか、一旗揚げて利益を得たいとかといった私心はないのかと、毎晩、仕事が終わってから自問自答していました。

半年ぐらい経って、まったく間違いがないと思って決心がついた。そこで、第二電電をつくると声を上げたのです。まわりの人はみんなびっくりして、「無手勝流で巨大な電電公社に挑戦するなんてドン・キホーテのようなものだ。やれるわけがないではないか」と言われたのです。

そのとき、戦後の経営者の中で若手の人たち、創業社長の方々や友人たち５、６名が、「稲盛さん、われわれもやるべきだと思ったけれども、どうしても勇気が出なかった。あんたがやるというなら応援するよ」と言って応援をしてくれることになったんです。結局、第二電電を興してみんなを引っ張っていくことになり、ソニーの盛田昭夫さんとか、ウシオ電機の牛尾治朗さん、セコムの飯田亮さんなどが続々と集まってくれて、

第二電電の前身、第二電電企画の設立パーティーで。右から、盛田昭夫ソニー会長、真藤恒電電公社総裁、稲盛氏、飯田亮セコム会長、牛尾治朗ウシオ電機会長、森山信吾第二電電企画社長（1984年5月31日、肩書は当時）

最終的には日本の大企業を含めて220社ぐらいが参画してくれました。

ただし、「稲盛さん、あんたが言い出しっぺだから、責任はあなたが取るんですよ」と言われました。もちろんそのつもりです。皆さんには迷惑はかけられない。だから、資本金だけ出してもらいますが、すべての責任は私が取りますということで始まったんです。

こころの中心に常に良心がある人

稲盛　中小企業を含めて、社員をまとめていくのにもリーダーの人間性が問われる。第二電電のような大きなプロジェクトをやるときに、何の保証もない中でみんなが賛同してくれるのも、やはり人間性だと思います。それが、先ほど言ったように、「徳」があるかないかだと思うのです。

「徳」というのは非常に高尚すぎて、私にそれほどの「徳」はありませんけれども、その場合には、世のため、人のためということがベースだったわけです。それはまさに私のこころの中の良心が強く、エゴが一般の人より少ない、そういう状態だったことが、みんなを引きつけたのだろうと思います。

私は理科系の人間ですから文学的なことは何もわかりませんが、「徳」というのはその人のこころの状態を表す言葉だろうと思います。

さっきから言いますように、良心というものを持っている。つまり優しい思いやりに満ちたこころですね。同時に、邪（よこし）まなこと、不正なことを忌み嫌い、どんなに自分にとって損であっても、正しいことを貫いていく。そういう、一面で強いものを兼ね備えた人を「徳の高い人」と言うのではないかと私自身は思っています。一言で言うと、こころの中心に常に良心がある人です。

吉川　理事長にとって、この人は人間としてすぐれた生き方をしているなとか、こういう人になりたいといったように、モデルになるような人や書物はあったんでしょうか。

稲盛　そういう典型的な方を見いだすのは難しいものですから、孔子、老子の教えとか、お釈迦さまの教えとか、そういうものに解を求めてきました。

日本にそういう方はいなかったのかと思った中で気がついたのは二宮尊徳（にのみやそんとく）＊です。学問はなかったけれども、農民として必死で働き、人間というものをつくっていかれた。晩年は大変立派な人間性を身に備えておられたために、幕府でも用いられて、世の中のために尽くされた、そういう例がありますね。

また、禅宗の白隠（はくいん）＊禅師というお坊さんがいらっしゃいます。白隠さんは静岡県の出身で、とてもすばらしい人間性を備えておられたようです。

神様が逆境を与えてくれた

鎌田　先ほど志の高さのことをおっしゃいました。その志の高さは、どういうふうにして形成されてきたのでしょうか。それは使命感にもつながってくると思うのです。あるいは、人生の意味、目的、どういうふうにこの人生を生きていくのか。社会のため、世のため人のために役立つようにどう生きるのか。

私は、今日は少年時代の話をぜひ伺いたいなと思ってまいりました。私は宗教哲学が専門なのですが、「徳」という漢字を分解してみると、右のつくりは「十四の心」となります。14というのは、イニシエーションの元服をする年齢で、ある意味で社会と自己が対面する時期だと思うんです。そのとき、純粋に、自分自身を問い、世界を問う。そこに1つの志が生まれるのではないか。

孔子の言葉に「学に志す」というのがあります。そ

鎌田東二教授

ういう少年時代、あるいは少女時代のこころの中に何があったのか。それがその人の生涯の使命感とか生き方を生み出していく１つになるのではないかと思っているものですから、幼少期あるいは青春期に、理事長がどういうふうな思いを持たれていたのか。そして、それはその後、志の高さとどういうふうにつながってきたのか。ぜひそのあたりをお伺いしたいのですが。

稲盛　残念ながら、幼少期に、そういう高い志を持っていたわけではございません。子どものころから、高校、大学に行くまでの間は、人一倍正義感が強いということはあったと思いますけれども、人生の中で高い志を持つようなことはあまり考えていませんでした。

私は鹿児島大学を卒業して就職したんですが、当時は朝鮮戦争が終わった直後で、就職難でいい会社はどこも採用してくれませんでした。それで大変貧乏な会社に就職して、そこでファインセラミックスの研究開発に従事したんです。あとから考えれば、当時は就職難でしたが、その会社にいつまでもいなくても、ほかの職もあったかもしれません。しかし、ともかくその会社で、与えられたファインセラミックスの研究開発に一生懸命打ち込まざるを得なかった。これは環境がそうせしめたといいますか、そういう逆境の中で、それに愚痴、不平、不満を鳴らすのではなしに、それが運命だと思って打ち込んだ。やる以上は、すべてのものを払拭して、その研究開発に打ち込もうと思ったのが、志だと言えば言えるかもしれません。

鎌田　私は、逆境に強い人間はどういうふうに形成されてくるのかということに非常に興味を持っています。どんなに社会の危機とか、大変な時期にあっても、そこをくぐり抜けていく力というのはいったい何なんだろう。理事長がその逆境の中で挫けないで、そこに打ち込んでやってこられたのはなぜだとお考えでしょうか。

稲盛　私の場合、中学生のときに終戦になりました。あたり一面焼け野原で、家も焼けてなくなり、大変な貧乏をしました。幸いにも両親は生き残っていたし、兄弟もみんな無事でしたので、掘っ建て小屋を建てて、戦後の混乱の中を生き延びてきました。母親が自分の持っていた着物を売り食いしながら、われわれ子どもたちを養ってくれたのです。やっと大学を卒業して就職し、田舎に仕送りをして親孝行ができるんではないかと思って入った会社は、もう今にも潰れそうなところだった。このようにずっと逆境続きだったのです。逆境を乗り越えていくような志とか勇気があったわけではありません。そういう逆境しか私にはなかったのです。

鎌田　環境そのものが逆境だった。

稲盛　はい。ですから、私の場合は、そういう逆境が続いて襲いかかってきた。そこで挫けるのではなしに、何とか生きなきゃならなかったというだけのことです。逆に言うと、それが私の気力を強くしていき、その後、志というようなものをつくっていった。

後で振り返ってみますと、神様はなんとすばらしい境遇を私に与えてくれたんだろうと思います。

私は地方大学ではありましたが、大学を１番で卒業しましたので、教授たちも「あなただったら一流会社でも通るだろう」と言ってくれたのに、どこも採ってくれなかった。しかし、もし私がまかり間違って、自分の希望した、当時のいい会社に入っておれば、おそらく今の私はなかっただろうと思います。バカじゃありませんでしたので、技術部長ぐらいにはなったかもしれませんが、今の自分にはなっていません。

小学6年生で宗教と出会う

鎌田　極端に言うと、逆境が２種類の人間をつくり上げるように思うんです。１つは、今おっしゃるような、逆境に強くて、人に感謝する、利他的なこころが生まれてくるタイプと、もう１つは、自分さえよければいいというので、逆境の中をエゴイスティックに生き抜いていく利己的なタイプ。

逆境を利他的な方向に生き抜くか、利己的なほうへ生き抜くか、この２つの道があると思うんですけれども、そこで利他のほうへこころが向かうのは、ものの考え方とか、感じ方とか、そういうものがやはり大きく作用していると思うんです。

稲盛　そうですね。確かに逆境というものが、人を２つの方向へ分ける。どちらかというと、世をすね、ひねて、エゴイスティックな人間になっていく人のほうが多いのかもしれません。

私の場合には、幸いだったと思いますが、小学校6年生のときに結核にかかって、それで旧制中学の受験に失敗したんです。私の家の離れのほうに、父親の弟夫婦と、その下の弟、つまり、私から見ると叔父・叔母が住んでいたのですが、その一番上の叔父が結核にかかって、私が小学校5年生のころに死んで、続いてすぐに、奥さんも結核にかかって死に、下の弟の奥さんも、それから2年ぐらい経って死んだんです。3人目の叔父さんが結核で療養しているときに、私も結核を発病しました。叔父・叔母は亡くなって、次の叔父がもう青瓢箪みたいになって寝込んでいるわけですから、近所の人たちには、「あそこは結核の血統だ。かわいそうに、和夫ちゃんとももうお別れだろう」と言われて、自分もそういうふうに思っていました。

当時、谷口雅春（たにぐちまさはる）＊さんという方が仏教の教えの真髄をベースに、「生長の家」という新興宗教をおこしていました。それを母親が信仰し始めて、私も、そういう集まりに2、3回連れていってもらいました。これは私の結核を治そうという気持ちもあったんだろうと思います。

当時、隣にご夫婦が住んでいて、奥さんがきれいな人でした。その方が生け垣の向こうから、「和夫ちゃん、気分はどう？」とか言ってくれるわけです。その奥さんも「生長の家」の信者で、「こんな本が出たよ」といって、縁側まで『生命の實相』という本を持ってこられる。それを貸していただいて、貪るように読んでいった。

鎌田　小学6年のときに、谷口雅春さんの本を読んで人生哲学を学んだ。ずいぶん早いですね。

稲盛　そうしているうちに、空襲が激しくなってきまして、中学1年のときにはもう青瓢箪で寝ている間がないといいますか、空襲がありますから逃げて防空壕に入らなきゃいかん。夜中に雨あられと焼夷弾が降ってきて、周囲の家がどんどん燃える中を母や兄、妹たちと逃げていく。そういうことがしょっちゅうありました。そうやって逃げ回っているうちに、大病はどこかへ行ってしまいました。

そういう宗教的なバックグラウンドが、小学6年生から中学に入るまでずっとありました。そんなことがあったから、逆境の中でも変なほうに行かないで、いい方向に行ったのではないかと思います。

鎌田　今お話を伺って、本当によくわかりました。そういう自分の支えになる経験があるかないかというのは、逆境の中でどう生き抜くか、その方向を決めますね。

稲盛　そうですね。それがまた、会社ができてから、私を非常にいい方向にリードしてくれた。

今言われて気がついたんですけれども、昨今は宗教が非常に軽視されていますが、そういうものに触れるか触れないかによって、人生が大きく変わるのかもしれませんね。

昭和13年（1938）ごろの稲盛家の人々。前列右端が稲盛和夫氏。その後ろが父畩市（けさいち）氏。前列左から2人目が母キミさん

きれいな魂にして旅立たせたい

鎌田　今から14年ぐらい前に、理事長は得度されましたね。先ほどのお話でも、孔子、老子や、お釈迦さまに問いかけてこられたということですが、妙心寺派のお寺で得度された。それは今までやられてきたことの延長線というのか、あるいは、ある節目ということでしょうか。

稲盛　私は、人間というのは、肉体とともに魂が一緒になったものだと思っています。まったく物理的な、60兆個の細胞の塊があって、それが思考も肉体的活動もすべて司っているわけですが、それだけで人間なのではなくて、それと魂が一緒になっているものが人間だと思っています。これは理屈ではなしに、そういうふうに信じているんです。

魂とは何なのかというと、これもまたわからない。こころとは何だというと、われわれが現世に生を受けてから今日まで生きてきた中で、見たり聞いたり、五感を通じて感じとり、また自分の頭で考える思考を通じて、あらゆるものの影響を受けたものだと思っています。そのこころとは別に、魂というものがあると私は信じています。仏教では「山川草木悉皆成仏（さんせんそうもくしっかいじょうぶつ）」と言いますが、森羅万象、あらゆるものに仏が宿っている、魂が宿っている。つまり、みんな等しく同じ魂を持っていて、最も根底の魂はみんな共通なんですが、そこに、過去世も含めて現世で得たこころといいますか、それがかぶさっている。

だから、魂はもともとは非常にピュアなもので、現世でわれわれが経験した思いがこころで、そのこころが覆いかぶさったものが魂だと、私は思っているんで

1997年 9 月、臨済宗妙心寺派の円福寺で得度、法名は大和（だいわ）。雲水の姿で托鉢をする稲盛和夫氏

す。

現世で経験したいろんな思いを含んだ魂が、あの世へ行って、輪廻転生して帰ってくる。だから、神秘体験なんかで過去生を語る子どもがいますが、それはその過去生を覚えている人なんです。

私は65歳になったときに、自分はいつか死を迎える。その死は、肉体の死ではあるけれども、魂は新しい旅立ちをしていく。そのときに、私の魂は、過去世から続いてきて、現世も含めたこころが上にかぶさっている。その私のこころは、ダーティーなこころをいっぱい含んだものですから、そういうものがそのままあの世に旅立っていいのかなと思いました。

だから、同じ魂が新しい旅立ちをするのなら、旅立つまでの間に、上にかぶさった私のこころを磨いて、ダーティーなものを剝がして、きれいな魂にしてあげなければ、人生を生きた意味がないではないか。あなたはすばらしい志を立てて、京セラを世界一流の会社にし、第二電電も現在のKDDIという大きな会社にした、とみんなが称賛してくれたとしても、私の魂にとっては何の価値もありません。

ですから、死ぬまでの間に、私は自分の魂の上にかぶさっているこころを磨いて、悪いこころを払拭して、生まれてきたときの魂よりもっとましな魂にしてあの世へ旅立たせたい。それには何が一番いいかと考えたら、ブッダの教えをもう１回勉強し直すことではないかと思ったのです。

鎌田　それが得度だったのですね。

稲盛　はい。若いころから、会社経営で悩んだりすると、臨済宗妙心寺派の、後に管長猊下をされた西片擔雪＊というご老師のお寺に伺って、お茶を飲ませてもらったり、大変親しくさせていただいておりました。そのご老師にそう申し上げたら、「稲盛さん、それはいいところに気がつかれました。それなら、私のところで得度をしませんか」とおっしゃっていただいた。それで、「お願いします」ということになったんです。

ですが、会社をやっていて忙しいものですから、お寺に入るためには１か月、２か月ぐらいスケジュールを空けなければならない。そこで、この日に得度をさせていただいて、そこからお寺に入って勉強させてもらいますということを決めて、しばらくして健康診断を受けましたら、胃ガンだということがわかった。しかも進行性の胃ガンだからすぐに手術をしなければならない。そこで、その得度をするはずの日に手術をしましょうということになりました。

手術がすんで、まだお粥しか食べていないときに退院しました。禅宗のお寺では毎日お粥ですから、それならちょうどいいんじゃないかということで、まだ体力が回復していなかったのですが得度して、若い雲水さんたち15〜16人といっしょに修行しました。禅寺の朝は３時起床で、みんな掃除も早いし、食べるのも早い。その若い雲水と一緒に、網代笠をかぶって、草鞋を履いて托鉢に行きますと、檀家のおかみさん連中が、「歳のいった新しい雲水が来たということは聞いていたけれども、だいぶお歳ですね」とか言われました（笑）。

京都賞の創設

鎌田　理事長は、稲盛財団を含めて、さらに社会的な貢献をしていこうと思われたわけですが、それはどういうふうな背景があって、そういう決断と実践に向かわれたのでしょうか。

稲盛　京セラという会社がどんどん大きくなっていき、株式を上場するということになりました。私は創業者ですから、大株主でもあって、株式を時価に換算すると、世間一般からは大変なお金持ちだということになるわけです。そのとき、大金を自由に使えると思うのは「悪魔のささやき」だと自分に言い聞かせていました。つまり、悪魔が私をお金持ちにして、私をそそのかすのではないかと思ったのです。

このお金は神様が社会のために使えということであって、それで贅沢をするとか、栄耀栄華を極めようとしてはならない。そのために神様が私をお金持ちにしたのではないはずだと思いました。ちょうどそのころ福井謙一＊先生がノーベル賞をもらわれることになりました。私もいろんな賞をもらったことがあるのですが、大変地味な技術開発、研究開発をしている人たちをたたえるような賞があまりない。そこで、人知れず苦労して研究を続けておられる研究者を励まし、喜んでもらえるような賞をつくりたいと思ったのです。

そこで、ノーベル財団を訪れて、ノーベル賞ができた経緯も勉強させてもらいました。福井先生のノーベ

京都賞の授賞式　毎年11月に国立京都国際会館で催されている。なお、財団法人稲盛財団から京都大学に寄贈された京都大学稲盛財団記念館には、京都賞に関する情報を広く紹介するための「京都賞ライブラリー」が設けられている

ル賞授賞式にも連れて行っていただきました。それで、ノーベル賞と競合するような賞ではなくて、お互いが研鑽できるような賞になればいいと思って稲盛財団をつくり、京セラの株と現金で約200億円を寄付しました。今では700億円ぐらいの財産を稲盛財団は持っています。私の持っている財産は社会から預かったものだと自分に言い聞かせ、それを実行に移したのです。

鎌田　京都賞をつくられたときに、ノーベル賞にはない部門として思想・芸術部門を設けられていますが、そこには理事長のどんな思いが込められているのですか。

稲盛　私は技術屋で、いわゆる科学万能主義的な一面があるんですが、それだけではないという考えがずっとありましたので、どうしても顕彰する中に、第3部門として思想・芸術の分野を入れようと思ったのです。

本当は、哲学や宗教を入れたかったのですが、財団をつくったときに、福井先生、岡本道雄*先生など、京大の錚々たる先生方と一緒にやっていました。その先生方には、「宗教」という言葉は最初から拒絶反応があるのです。

それでも、私はしょっちゅうそういうことを言っていましたが、その先生方が納得してくれるようにすると、どうしてもマイルドなものになってくる。「思想哲学、芸術といった文系のものも立ててバランスを取らなければ」と言いまして、「それだったらけっこうです」というので第3部門ができました。

ところが、第3部門に思想・哲学を入れたんですが、結局、表彰するのは哲学を研究する学問、「哲学学」になってしまうんです。それは私が考えているのとは違うと感じていたので、10年ぐらい前から、「いや、私が思ったのはそういうのではないんです。第3部門で、たとえばマザー・テレサみたいな人が表彰を受けることはないんですか」と言うようになりました。本当は、私は哲学学を研究した人ではなくて、哲学を実践した人たちを顕彰したいと思っていたわけです。

福井先生や岡本先生から、「私は稲盛さんが好きで協力をしているけれども、稲盛さんがそちらのほうに行ってしまうのを防ぐためなんだ」と言われたことが何回もあります。

鎌田　（笑）逆ですね。

稲盛　その先生方が悪いんじゃなくて、まさにそれが今の日本の学会の主流だと思うんです。だから、私の

平石 界助教

友人でもありますが、村上和雄＊さんが「サムシング・グレート」ということを言います。私は彼とよく話をしているけれども、村上先生はすばらしい考え方の持ち主なので、「一度財団で集まって彼の話を聞きましょうよ」と提案すると、「いやいや、あんな話は……」と言って、だれも受けつけてくれない。

ですから、専門の研究者の方は別にして、学者でそういう宗教的なことを言い始めると、もう学者ではないという烙印を押される。

鎌田　そうですね。

稲盛　本当は、理系の分野ですばらしい研究ができているのも、単なる頭脳の産物ではないはずです。何かそういう精神的なものがあるにもかかわらず、それを認めようとしないのだと思います。明治以後、日本に入ってきた近代科学思想が災いをしているのではないでしょうか。今やっと少し見直されてきたという感じです。

鎌田　そうですね。

稲盛　こころの未来研究センターをつくられると聞いたときに、「支援します」と言ったのは、まさにそういうことだったんです。日本を代表するような大学の中で、そういうことに目覚めて研究するのは非常にいいことだと思った。本当は、もっとそこをやっていただきたい。だから、私は前に吉川先生にも言ったんです、「単にこころを心理学の延長みたいなものとして捉えるのでは意味がありませんよ」と。

鎌田　私なんかは、むしろ魂の領域が専門のようなところでやっています。こころの未来研究センターのユニークなところは、カール・ベッカー先生や私は、魂の領域をきちんと取り上げ、そして、生き方と結びつけて考えています。一方にそういう世界があり、もう一方に脳科学があり、真ん中に心理学がある。そういう、宗教から脳科学まで含む大きい意味での「こころ学」をみんなで一緒につくり上げていきましょうと話し合っています。

稲盛　そうであれば、今みんなが求めていることだと思います。

出発点は利他的か利己的か

稲盛　ところで、大橋力（おおはしつとむ）＊先生とは交流がありますか。

吉川　はい、センターができた当初から、大橋先生には折に触れて助言をいただいてきました。

稲盛　私は大橋先生とは財団のほうでお付き合いがあるんです。大橋先生は「利他のこころ」ということを言っておられますね。

分子生物学の研究者も含めて、細胞の領域まで、利己的な遺伝子を持つ細胞というので、利他的行為まですべて利己的な遺伝子による行動として説明がつくという学説があります。

平石　実は私はそっちのほうをやっています。たぶん、少し誤解されているかなと思うところがありまして、究極的には利己的なのかもしれませんけれども、「利他のこころ」を持っていることは否定はしない。というか、もう否定しようがなく「利他のこころ」はあると思うんです。ただ、なぜ人間はそんなに「利他のこころ」を持てる動物になったのか、利己的なはずのものからどうして利他が出てきたのかということを考えたいというのが私の興味なんです。

稲盛　だから、それはもともと利己的なものだと決めつけておられるからであって……。もともと利他的なものというのはあるんですよ。

平石　そういう立場もあると思いますし、私は利己的なほうから解明できるんじゃないかと思っています。最終的にどちらが正しいかは、まだきりがついていませんね。

鎌田　魂の領域を考えると、利他から始まるんですね。

稲盛　始まるんです。

鎌田　それは本当に観点の大きな違いです。

平石　そこは出発点の違いだと思うんですが、ただ、今日お話を伺っていて、私は利己のほうからやっているんですけれども、理事長の考えておられることと、私たちの専門とする分野が今やっていることは、結論はすごく似ています。たとえば、「利他のこころ」について、不正を憎むところがあると理事長はおっしゃいましたが、私どもの専門でも、ただ正しいだけではなくて、不正を憎む、きちんとそれに対処することも大事だと言われていて、すごく似た話になっているのは面白いなと思いました。でも、出発点は違うというところですね。

宗教の役割が大きいバリ島とブータン

吉川　去年から「京大ブータン友好プログラム」というのが始まって、ブータン王国に行く機会があったのですが、それ以来ブータンの文化や宗教に強い関心をもつようになりました。

稲盛　ブータンには、大橋先生もしょっちゅう行っているでしょう？

吉川　ブータンには最近行かれたと聞いています。インドネシアのバリ島にはよく行かれますね。

稲盛　今度、梅原猛さんが私といっしょにバリ島に行きたいというので、大橋先生にお話ししたら、喜んでご案内しましょうと言われて、一緒にいくんです。

鎌田　そうですか。バリ島はセンターの教員も大橋先生にコーディネートしていただいて、何度か行っています。

吉川　バリ島もブータンも、生活のなかで宗教がとても大きな役割を果たしているというのが印象的でした。ブータンの根底にあるのはチベット仏教の価値観です。ガイドさんが、人間にとって一番大事なものはコンパッションつまり思いやりと、知恵と、パワーの３つだと。そして、人間が一番抑えないといけないものは、貪欲であることと嫉妬と無知、その３つだと言っていました。

稲盛　ブッダはそう言っていますね。

鎌田　貪瞋痴（とんじんち）の克服ですね。

吉川　ブータンとの交流の中で、これからどういうことがやっていけるのかを考えていこうと思っています。

　おそらく理事長がお考えになっていることとも繋がると思うのですが、こころの未来研究センターでは、学問のための学問とは違う、新しい「こころ学」をつくっていくことができたらいいなと思っています。

鎌田　そうですね。総勢で100名を超える連携研究員の先生方がいますから。

稲盛　平石さんはブータンに行かれましたか。

平石　まだ行っておりません。

吉川　一度行ってみると、きっと新しい発見があると思います。

鎌田　『風の谷のナウシカ』の風の谷です。

平石　そうですね。

吉川・鎌田・平石　本日はどうもありがとうございました。本当にいいお話をたくさん聞かせていただきました。

稲盛　こちらこそありがとうございました。

（2011年７月25日、京セラ株式会社本社にて）

編集部注

二宮尊徳（1787－1856）　江戸後期の農政家・思想家。幼名金次郎。報徳精神に基づいて小田原藩など六百村の農村を復興、明治以後も農村の精神的支柱として影響を与えた。戦前、多くの小学校に薪を背負って書を読む少年金次郎の像が建てられた。

白隠（1685－1768）　江戸中期の禅僧。臨済宗中興の祖とされる。15歳で出家、諸国を行脚し修行を重ねて大悟、32歳で郷里駿河国の松蔭寺に帰住、多くの禅傑を輩出した。博学で本格的な漢文体の語録を残す一方、平易な法話も得意とした。詩文、書画も多数残る。禅僧がかかる病を治す内観の法を広め、多くの僧を救った。

谷口雅春（1893－1985）　新宗教教団「生長の家」の創始者で初代総裁。大本教に入信、出口王仁三郎の下で活躍したのち同教を去り、「生命の実相を知れ」との啓示を受けて1930年雑誌『生長の家』を創刊して立教した。聖典『生命の實相』、聖経『甘露の法雨』など、生涯の著作は400冊以上に及ぶ。

西片擔雪（1922－2006）　臨済宗妙心寺派僧侶。新潟県栃尾市生まれ。熊本県見性寺住職、八幡円福寺僧堂師家、西宮海清寺僧堂師家等を経て、2002～06年、臨済宗妙心寺派第31代管長に就任。著書に『人生は春人ハ花』『禅のこころ大和のこころ』『無門関提唱』『碧巌録提唱』など。

福井謙一（1918－1998）　化学者。奈良県生まれ。京都帝国大学工学部工業化学科卒業。同大学助教授等を経て教授となり多くの門下生を育てた。1982年退官し同大学名誉教授となり、京都工芸繊維大学学長就任。フロンティア電子理論、軌道対称性と選択則の理論、反応の理論などの業績により1981年ノーベル化学賞受賞。文化勲章受章。

岡本道雄（1913－　）　医学者。京都大学名誉教授、日独文化研究所理事長・所長。京都府舞鶴市生まれ。京都帝国大学医学部卒業。同大学院特別研究生修了（脳神経解剖学）。京都大学総長、科学技術会議議員、臨時教育審議会会長、医道審議会会長、財団法人稲盛財団会長などを歴任。勲一等旭日大綬章受章。ドイツ連邦共和国功労勲章大功労十字星章受章。

村上和雄（1936－　）　分子生物学者。筑波大学名誉教授。奈良県天理市生まれ。京都大学大学院博士課程修了。1983年、高血圧の原因酵素レニンの遺伝子解読に成功、世界的な注目を集める。また人智を超えた偉大なる何者か（サムシング・グレート）についての考察を深めている。日本学士院賞受賞。著書に『生命の暗号』『サムシング・グレート』『遺伝子オンで生きる』『奇跡を呼ぶ100万回の祈り』など。

大橋　力（1933－　）　文明科学研究所所長、公益財団法人国際科学振興財団主席研究員。東北大学農学部卒業。千葉工業大学教授、ＡＴＲ人間情報通信研究所感性脳機能特別研究室長等を歴任。作曲、演出などを手がけ、山城祥二の名前で芸能山城組を主宰するかたわら、情報環境学、感性科学、分子生物学、人工生命、生態人類学などでも既成概念にとらわれない研究を展開している。著書に『音と文明』など。